

# 西松会新聞

西松会  
一橋大学  
ア式蹴球部  
http://old2.josuikei.net/  
circle/soccer/

## 欧州サッカーから見えるもの

私は現在イタリアのボローニャに住んでいます(豊田自動織機勤務)。2003年1月のベルギー赴任以来、05年1月にドイツ、07年10月にイタリアと2度の欧州域内転動を経て、通算では欧州在住期間が6年になります。サッカーファンにとっては非常に恵まれた駐在地であり、この間、ドイツワールドカップはもとより、ブンデスリーガ、セリエAの試合を多く観戦することが出来ました。以下、欧州サッカーの観戦を通して特に強く感じたことを3点お伝え致します。現役の皆さんに少しでも参考になれば幸いです。

### 「役割分担」

まず1点目は強いチームほど各選手の役割分担が明確であるという点です。例えばセリエAウディネーゼのペペは、技術スピード、決定力全てにおいて超一流のフォワードですが、彼は試合中、常にサイドに張り付いています。彼のこのチームでの役割はイタリアでは珍しいウイングであり、例えばボールがなくなると、中へ絞ることはしないで辛抱強くタッチライン際でボールを待ちます。一旦彼にボールが渡れば彼の独壇場で縦に突破し鋭いクロスを上げるか、中に切り込んで強烈なシュートを放つかは彼の自由です。

また、ミランのガットゥーゾの役割は相手の攻撃の流れを断ち切ることです。ある試合で数えてみましたが、彼は12回相手の攻撃を止めました。そのうち8回はフールで止めています。彼が欠場しているミランの試合を見ると彼の役割の重要さが良く分かります。役割という言葉を使い換えれば、どのようなプレーを最も期待されているかということ。現役の皆さんも、何が自分に最も求められているプレーかを、監督・GMあるいはチームメイトとしっかり議論してください。

### 「責任感と闘争心」

2点目は、求められているプレーをやるべき各選手の責任感と闘争心です。欧州サッカーを生で見ると対人プレーの激しさ、しつこさに驚きます。自分の仕事場では絶対に相手に負けない、という気迫が伝わってきます。もちろん、彼らはプロとして、賭しているものが違います。現役の皆さんも少なからず何かを犠牲にしてサッカーに打ち込んでいるはず。あるいは誰かを犠牲にして試合に出ているはず。ピッチに立つたからには、それらの思いを胸に刻み、まずは自分の仕事場での戦いに勝つことに全力を尽くしてください。

### 「ワンツーパス」

3点目が、ワンツーパス(壁パス)の有効性です。何を今更、と思う方もいるかもしれませんが、これが極めて有効な崩しのテクニクだと再認識しました。欧州サッカーではサイド、中、ペナ周辺などでも使います。プロのディフェンダーですら、ワンツーと分かっていても防ぎづらいうです。現役の皆さん、一度意識的に多用してみてくださいいかが?

以上勝手なことを書きましたが、最後に申し上げたいことは、やはりサッカーは観戦するよりプレーするほうが何倍も楽しいということ。現役の皆さん大いにサッカーを楽しんでください。

若林 紀雄(昭和59年卒)

## 2部復帰にあと一步

### 東京3部リーグ

平成20年度の東京都3部リーグは、昨年8月に開幕、一橋は4勝3分1敗の勝ち点15で3位にとどまった。当面の目標だった2部復帰にあと一步届かず、来シーズンに昇格を期することになる(2面に戦いを振り返って)。

## オシムの言葉を自戒にして

今のサッカー界は休まる時がほとんどない。世界から日本、代表から各クラブから高校サッカーまで、いや、もつと下の世代まで目を移せば、ひっきりなしに試合が続く。遠征・合宿を入れると一体どうなるか。自分の記憶が確かならば、去年ある日本代表選手は年間65試合ほどに出場、中東3往復に豪州往復、東南アジアも何往復か...といった具合。

自分が現役サッカー部時代には、秋季リーグ7試合でかなり達成感があったから情けない。春とあわせてもせいぜい公式戦は年間15~20試合。比べるのはまったくもって失礼だが、いかに肉体的・精神的に厳しい中でやっているか皆さんなら分かると思う。

「サッカー選手ならば、サッカーに生活の全てを捧げるのが当然」とは、先ごろ



今シーズンは少数精鋭の4年生を中心に

よくまとまり、初戦の杏林を苦しみながらも降した後は、2戦の明星、3戦の東工大を順当に撃破、4戦の農工大もサイド攻撃が実り、開幕から4連勝と勢いに乗った。しかし5戦以降は優勢に戦いを進める展開もみられたが、決定力不足が目につく。外語大、大東大、首都大と3戦連続引き分けに終わった。勝てば2部復帰という最終節の対日大商戦にすべてをかけたが、一瞬の隙を衝かれて失点、反撃もむなしく逃げ切りを許した。

リーグ前半の勢いを保持できず、残念な結果に終わったが、新4年生を先頭に課題を克服して再チャレンジを期待したい。

平成20年度 東京都大学リーグ3部戦績表

チーム	首都	外語	一橋	日商	大東	農工	東工	杏林	明星	勝点
首都大	-	0●2	1△1	4○0	2○1	2○0	1○0	6○1	7○0	19
東外大	2○0	-	1△1	1●4	1△1	3○1	2○0	5○1	8○0	17
一橋大	1△1	1△1	-	0●1	1△1	4○1	1○0	2○0	4○0	15
日大商	0●4	4○1	1○0	-	1△1	3○2	4○1	2△2	0×3	14
大東大	1●2	1△1	1△1	1△1	-	9○2	1△1	4○1	3○0	13
農工大	0●2	1●3	1●4	2●3	2●9	-	2○1	3○0	6○1	9
東工大	0●1	0●2	0●1	1●4	1△1	1●2	-	3○0	2○0	7
杏林大	1●6	1●5	0●2	2△2	1●4	0●3	0●3	-	3○1	4
明星大	0●7	0●8	0●4	3○0	0●3	1●6	0●2	1●3	-	3

○不戦勝 ×不戦敗

まずは年頭、日本代表と一橋サッカー部の勝利を祈りつつ。毎週日曜夜「やべつちFC」も是非、ご覧ください(笑)

(平成11年卒) 進藤 潤耶

卒業して7年が経つ。内勤時代が長く、いわゆる取材をして原稿を書く「記者」としてはようやく3年目を迎えているところだ。ここ2年は鹿島アントラーズを担当し、Jリーグ連覇に携わる幸運に恵まれた。今季からは浦和レッズを担当する。もともと、担当チームだけでなく、代表戦はもちろん、クラブW杯や高校サッカーにも足を運ぶ日々を送っている。記事を書くにあたって公平を期すのはもちろんだが、それでも取材を積み重ねて選手の間を性に触れるうち、自然と「お気に入り」は生まれ

のことは忘れない。そう話す大世の好きな言葉は「雑草魂」と「反骨心」。同じ「都3部出身」として、活躍を期待してしまう。実際に取材していても、歯切れのいい話しぶりが気持ちいい。自然体で喜怒哀楽をハッキリ表し、ユーモアも忘れない。「頑張ります」しか言えない選手とはひと味違う。日本代表を見渡しても、俊輔や関根王など二流選手ほど「自分の言葉で話せるが、大世も同様だ。サッカーが自己表現の重要なスポーツであることを、改めて感じる。個人的には、今回のW杯最終予選で日本と北朝鮮が同組になることを期待していた。対決の構図が盛り上がるのが一つの理由。もう一つは、実は日本と同組になった場合、北朝鮮代表が朝鮮大キャンパスで事前合宿を行う計画だったこと。取材が「もとき」や「藤乃木」に「や」にも久々に足を運ぶために...と二重の意味で残念でならない。

卒業して7年が経つ。内勤時代が長く、いわゆる取材をして原稿を書く「記者」としてはようやく3年目を迎えているところだ。ここ2年は鹿島アントラーズを担当し、Jリーグ連覇に携わる幸運に恵まれた。今季からは浦和レッズを担当する。もともと、担当チームだけでなく、代表戦はもちろん、クラブW杯や高校サッカーにも足を運ぶ日々を送っている。記事を書くにあたって公平を期すのはもちろんだが、それでも取材を積み重ねて選手の間を性に触れるうち、自然と「お気に入り」は生まれ

のことは忘れない。そう話す大世の好きな言葉は「雑草魂」と「反骨心」。同じ「都3部出身」として、活躍を期待してしまう。実際に取材していても、歯切れのいい話しぶりが気持ちいい。自然体で喜怒哀楽をハッキリ表し、ユーモアも忘れない。「頑張ります」しか言えない選手とはひと味違う。日本代表を見渡しても、俊輔や関根王など二流選手ほど「自分の言葉で話せるが、大世も同様だ。サッカーが自己表現の重要なスポーツであることを、改めて感じる。個人的には、今回のW杯最終予選で日本と北朝鮮が同組になることを期待していた。対決の構図が盛り上がるのが一つの理由。もう一つは、実は日本と同組になった場合、北朝鮮代表が朝鮮大キャンパスで事前合宿を行う計画だったこと。取材が「もとき」や「藤乃木」に「や」にも久々に足を運ぶために...と二重の意味で残念でならない。

## 試行錯誤のなか基盤強化

昨年4月に西松会の代表幹事を仰せつかってから10ヶ月が経過しました。この間、①現役活動の支援、②会員間のコミュニケーションの活性化、という西松会の目的を達成するために試行錯誤で取り組んできました。この紙面をお借りして、これまでの活動の一部をご報告したいと思います。

### 〈幹事会の活性化〉

まず、西松会の基盤強化のために「幹事会の活性化」に取り組まれました。西松会の運営は、会長副会長をはじめとする16名の幹事団が中心となつて行っています。隔月で開催する幹事会には、今年度は若手の幹事も多く参加いただき、それぞれの立場からご意見を頂くことができるようになってきました。

### 〈コミュニケーションの向上〉

次に、取り組んだのは、会員各位への情報の提供による「コミュニケーションの向上」です。ホームページを通じた情報発信を重視し、現役もこれに力を入れてきたお陰で、今年度の現役のHPでは途切れることなく現役の活動状況をお知らせすることができたのではないかと思います。(他大学のHPには「一橋を見習いたい」との記事もあった

ほどうです。また、メールアドレスが把握できている会員の皆様に向けたメルマガの配信も開始しました。まだ始めたばかりなので、どのように受け止めていただいているかどうか分かりませんが、西松会や現役の近況を知っていただくのきっかけとして、しばらく続けていきたいと思います。

### 〈風間氏の講演〉

さらに、3月の総会の場で、風間八宏筑波大学監督の講演を企画しました。風間氏は現在のサッカー界で高い評価を受けている指導者の一人で、日経新聞のコラムなどで記憶の方も多いかと思います。現役だけでなく西松会会員の皆様にもご参考になるお話をうかがうことができるのではないかと期待しています。

まだまだ会員の皆様に変化を感じていただけたところまで達していないとは思いますが、ここに記載したようにひとつひとつ西松会をより良い組織にしていこうと努力を積み重ねていこうと思います。引き続きのご支援をいただきますようよろしくお願いいたします。

西松会代表幹事 樋口 哲司(昭和59年卒)

# 戦いを 終えて

## 来シーズンを 昇格の喜びを

秋季最終戦、試合終了の笛が鳴り響いた瞬間に頭の中が真っ白になった。数秒後、溢れ出る涙を止めることができなかった。

大会中、引き分けが続いて苦しい時も平静を装っていた自分ではあったが、その実、心の中では不安と緊張が続く毎日であった。自分にとって最後のシーズンであるということが問題ではない。ただ、来シーズンを迎える後輩たちにはぜひとも2部という舞台でサッカーをして欲しい。

## サッカーをどのくらい理解しているか

昨年とり上げた「声」の重要性に関連してそれに内容が伴っているか、きちんと理解して使われているか、ということを描きたくて書いています。

小平のグラウンドでよく耳にするところでは、例えば「浮かすな!」とか「中に入れるな!」といったものがあります。確かに、シュートがクロスバーの上を超えていたり、中央の選手へのパスが相手にインターセプトされてピンチを招いたりしている、間違った指摘をしている訳ではありません。しかし、誰かが失敗したことに對して、現象そのままを言葉に表す行為には少し寂しい気分になります。練習や試合などで聞こえる声の内容は、チームのレベルを如実に表すバロメーターの一つではないでしょうか。

例に挙げた2つの言葉は「下手くそ、もっと練習しろ」という程度で、大した意味がないだけとも言えます。これが、もう少し戦術に近いことかどうかでしょうか。「蹴り合いになってしまった」、「中盤が間延びしてしまった」、「もっとワイドに展開すれば良かった」。こうしたコメントは、プロの選手からもよく聞かれる反省の弁の類いです。我々も試合中に、「簡単に蹴るな」、「もっと狭くしろ」、「サイドを変えろ!」などよく言っている訳です。

では、なぜポストプレーが有効か、なぜコン

い、という気持ちで臨んだ秋季であった。思い返してみると、1年から3年の時の秋季リーグの記憶は1試合1試合鮮明に残っている。しかし、つい最近終了した秋季リーグの記憶はほとんどない。全力で駆け抜けた結果であるのか。だが、最終戦の試合終了の笛は耳に残っている。思い出したに悔しく、夜も眠れない。そしてその悔しさを残したまま3部の舞台で戦うことになってしまった後輩たちに、自責の念を強く感じている。

残された後輩たちは昇格の喜びというものを未だ知らない。だからこそ来シーズンは優勝して2部昇格という喜びを味わってほしいと思う。負けて得られるものはあるかもしれないが、それよりも勝つて得られるものの方が間違いなく大きい。情けない話であるがここ最近、後輩たちには悔しさというバネをしか与えることが出来なかった。そのバネが跳ね上がる時が来シーズンは間違いなく来ると思う。真面目で誰

バクナ守備が有効か、なぜサイドチェンジが有効か、といった問いに、どれだけの選手がきちんと答えることができるでしょうか。「それは○○だから」のひと言で済ます程度の理解では、試合でうまく行かないときに原因を分析することも、まして効果的な対策を練ることもできないでしょう。

逆に言えば、こうしたプレー要素について「どういう効果があるのか、なぜ良いプレーなのか」を常に考え、理解し、皆で共有することで、ことさら大げさな戦術論やシステム論を持ち出すまでもなく、大きくチーム力を高めることができるでしょう。

我々が属するリーグのレベルにおいて、技術的に「上手いほど強い」傾向があり、トレーニングによって技術を伸ばす重要性は非常に大きいと考えています。また、理屈や言い訳ばかりで、上手くなる努力が疎かになってはいないか、という懸念を感じることも少なくありません。そのうえで、『学力一流、サッカー三流』と揶揄されないためにも、グラウンドで使っている言葉やミーティングでの話し合いなどに、理解や内容が伴っているか、十分に振り返って必要があると思います。

監督 赤星 真一(平成4年卒)

よりも真剣にサッカーを愛している君たちなら、大輪の花を咲かせることが出来ると信じている。我々4年生がここまで全力でサッカーに取り組み、大学生活で最高の思い出を作ることが出来たのは西松会の方々の温かい援助のおかげです。本当にありがとうございました。我々もこれからは西松会の一員として後輩にエールを送っていきたく思います。

齋藤 隼人(主将 4年)

## 後悔しない最善の方法

今シーズンの目標は「2部昇格」、現役部員はもちろんOB・OG含めサッカー部に関わる全ての人が期待していたことだったと思いが、僕自身2部という舞台で2年間闘うことが出来た経験はサッカー人生のなかでも非常に大きな財産であり、後輩にその2部の舞台を提供することこそがグラウンドマネージャー(GM)としての使命だと強く思っています。

今シーズンの目標は「2部昇格」、現役部員はもちろんOB・OG含めサッカー部に関わる全ての人が期待していたことだったと思いが、僕自身2部という舞台で2年間闘うことが出来た経験はサッカー人生のなかでも非常に大きな財産であり、後輩にその2部の舞台を提供することこそがグラウンドマネージャー(GM)としての使命だと強く思っています。結果的に昇格出来なかったのは事実ですが、後悔しているのは事実です。もし内容がどうあれ、昇格していらなかったら後悔するのはいくらもありません。しかし自分自身これほど後悔するのは今シーズン本場にサッカー部に真剣に接し、取り組んできた結果だと今は考えます。

小学校1年から始まったサッカー人生でいろんな経験をしてきましたが、サッカーを通して得たものが一番多かったのは間違いなく今年だと強く思います。「失敗は成功のもと」という言葉があります。僕にとつてはサッカーに對してこの言葉の通りである機会はないかもしれません。僕自身が今後の人生においてこの経験をすることでサッカー部として成功することは可能であり、僕自身は今後の人生においてこの経験を「軸」にして生きていけると思っています。それほど僕にとつて大きな一年だったと振り返ります。

間違いない期待するのは「2部昇格」です。もう一つ今後GMになる人たちに「自分を信じて」ということを伝えたいと思います。それが後悔しない最善の方法なのかと今になって思います。現巨人監督の原辰徳の言葉で「誰と心中したら一番後悔しないかを考えて選手を起用している」と答えていました。この言葉を参考に良いシーズンを作っていただきたいと思います。

高田 光大(GM 4年)

## 「勝負強さ」の不足を痛感

2008年10月26日の秋季最終戦、日大商学部戦の試合終了のホイッスルとともに、私の大学サッカーは終わりました。その時になって初めて、自分が1年生の時に見てきた4年生たちの引退の瞬間の気持ちがわかった気がしました。今シーズンの結果は4勝3分1敗、勝ち点15で3位。残念ながら昇格はできませんでしたが、それぞれのシーズンの結果によって最終戦が終わった直後に明るかったり暗かったりしたでしょう。けれど、最後はやっぱりみんな同じように笑って小平で後輩たちに手綱を渡して引退したのだと思います。

今シーズンはチーム全体で努力できた1年だったと思います。例年に比べ、全員が定期的に如水スポーツクラブで筋肉トレーニングに励みました。走り練習も昨年より多くし、ハードであるにも関わらず全員で声を出し合い乗り切りました。努力量ではほかのチームに負けていない自信はありました。

それでも昇格できなかったのは、接戦をものにしない「勝負強さ」が足りなかったのではないかと感じています。勝負強さとは言葉では簡単に言えますが、決して容易に身に付くものではありません。来期はそういった勝負強さにこだわって

## ホームを生かす戦術は

この数年、仕事の関係で東京と山口の二重生活となり、観戦は1シーズン2、3試合しかできない状況です。私の現役時代と変わるの、まずグラウンドの位置が90度違うこと、応援がなかなかユニークなこと、しかしなにかいって現役諸君の技術のレベルの高さと戦術面の変化が目につきます。私たちのときは同期のキャプテンは、広島出身とはいえず、入学後本格的にサッカーを始めた人でした。また戦術面ではWMフォーメーションが主体で、現在のコンパクトなサッカーとは異なるものでした。

また監督も不在で、キャプテンとグラマネを中心にして、練習も試行錯誤の連続でした。それでも関東2部と東京都1部でプレーできたのは足らざるを補う猛練習があったとはいえず、全体のレベルが現在とは相当違っていたと思えます。

勝てるチームを作っていくっていいです。2、3年生は今シーズンの努力の分、実力は確実に向上していますし、今年入部した新入生は生意気ですが個々のレベルが高く、来シーズンは昇格が期待できそうなので、来年度5年生(?)と考える私は、秋季は毎試合応援に行きたいと思っています。

最後に、私が大学の4年間小平でサッカーをできたのは、部活を支えて応援してくださったOBの皆様のおかげであり、深く感謝いたします。また、サッカー部で過ごした4年間に会った最高の先輩たち、後輩たちそして同輩たちに感謝したいです。

藤井 翔(副主将 4年)



## 誇りに思う3年間

2008年10月26日に秋季リーグ最終戦が行われ、この試合をもって私は一橋大学アス蹴球部のマネージャーを引退することになりました。3年間を振り返ると、楽しい思い出も辛い思い出もたくさんありますが、やはり最後は

現在のリーグでは、おそらく大多数のプレーヤーは、中学ぐらいからの経験者であると思います。その結果として技術の高さと、コンパクトなゾーンでのスピードと激しさが特徴のように感じられます。また一橋の試合を見た限りでは接戦が多く、いわば力の差があまり感じられません。したがってコンディショニングや人が人の有無、チャンスでの決定力等が勝負を分けることになっていくでしょう。この数年は残念な結果に終わったことも少なくありませんが、何かが足りないのかもしれない。

練習を見る機会もなく、戦術面での狙いも分からない立場で、なにかが言えるわけではありませんが、ひとつだけ感じるのにはホームのアドバンテージを生かす手立てがあるのではないかと感じています。最近ほとんど試合が小平で行われています。若干縦・横とも狭いとおもいますが、練習でその感覚を身に付けているのを、生かす工夫があるのではないのでしょうか。例えばサイド攻撃では、ゴールライン付近から

寂しい気持ちでいっぱいになりました。そして、大学時代の3年間を毎日サッカー部のことばかり考えて過ごせた満足感のようなものも感じていました。

振り返るとポロポロの部屋や土にまみれたジャージ、小平のグラウンドのすべてが懐かしく思えます。サッカーに取り組み環境としてはまだまだ私立の大学には劣りますが、その厳しい環境の中で高い意識を持ってみんなで勝利を目指したことを私は誇りに思います。最後の1年間は本当に様々なことがあり、チームを背負う4年生の姿を見ながら自分の非力さを痛感することもたくさん経験し、同時に大きく成長できたのではないかと、思っています。サッカー部を応援し支えて下さっているOBの方々ははじめ、1年生や2年生の頃の先輩方、そして後輩のみんなにとっても感謝しています。

最後に来シーズンへの期待として、やはり今シーズンを果たせなかった3部優勝・2部昇格ということも挙げたいと思います。新4年生はとも仲がよく、後輩たちをうまくまとめることができると思いますし、新2・3年生は個性が強いですがサッカーになるとも頼りがいがあります。そこに新入生が加わった新チームで今度こそは3部優勝・2部昇格を果たしてほしいと思っています。

親川 文(マネージャー 3年)

マイナスのセンターリングが上れば、絶好のチャンスですが、ゴール前がごちゃつくケースも散見されます。時としてアーククロスも効果的ではないのでしょうか。またセットプレーもグラウンドの距離感を生かせる機会なのではないでしょうか。無論十分認識された上でゲームプランがあるとしますが、そんな感じもあると受け止めていただければ幸いです。

観戦の後は、居合わせた3、4人で一橋学園前の某店で、反省会をやるのを常としていますが、やっぱり負けた後は気持ちが上りません。私の考えでは、アマチュアスポーツでは、無論負けから学ぶことは少なくありませんが、勝つことが大いなる喜びです。

今年のリーグ戦こそは、勝つ喜びを皆で味わえるよう、また次の年は厳しいけれどより高い試合ができる舞台に立てるように、期待していますので頑張ってください。

清水 幸男(昭和44年卒)

# 大学リーグ一部だった一橋

昭和21年(1946年)の秋、戦争で中断していたサッカーのリーグ戦が再開されることになり、松浦さん(22年卒)、永倉さん(23年卒)を中心にわか仕立てのチームが編成されて試合に臨んだ。

当時の一橋は、まだ旧制東京商科大学で、戦前の一部所属実績を継承して大学一部リーグに所属していた。しかし、早大、慶応大、東大、商大の他、立大、千葉医大も所属していたと記憶している。



OB戦は例年にないにぎわい(東京巣鴨の三菱養和クラブにて)

終戦の翌年で、軍隊から復員してきたばかりの学生が、食べるものもなくアルバイトに追われてろくに学校にも行けずスポーツどころではない時代の話である。

今では一橋が一部に居たことなど誰も知らないし、西松会という名前も読めない人が少なくない時代である。しかし、一部リーグに属したことは何ものにも替えられない誇らしく貴重な体験だった。

西松会も80年の歴史を超えて組織は巨大化し、執行部もコミュニケーションで苦労しているという。これは西松会だけの問題ではなく、組織の歴史が古くなるほど人数も多くなり、幾つもの世代を包含してその中身の違いも益々多様化する。

我々にとっては、学生が寄付をとりこぎにきて軽いランチや雑談を楽しみ、就職の相談にのったりした頃が妙に懐かしい。

それは30人の部員が1人か2人1組で夫々5人から10人の先輩を訪問すれば済んだ頃の話で、今では物理的に難しくなり、インターネットでの連絡や振り込み送金に頼らざるを得なくなっている。そうなるに、仲間意識や友情が薄くなっているのはあたり前だろう。

西松会も如水会も同じ学校を卒業した仲間の会としての共通の地盤を持つもののクラス会ではない。もう一度、会のできた原点や目的に立ち返って、そこからもつと的をしぼった気持の共有できる運営のあり方を考え直す機会かもしれない。

森重 利直(昭和24年卒)

# 枯れ木でも小平で応援を

ボールを蹴らなくなつてから(正確には蹴れなくなつてからと言ふべきか)かなり久しい。若い頃はどつてことはなかつたが、学生時代、リーグ戦間際になって痛めた膝の捻挫が加齢による筋肉の衰えとともに悪化し、冬にはゴルフをやるのも辛い。従つて今でもボールを蹴っている連中を見ると羨ましくて仕方がない。そのとき練習を休んでじっくり治療すれば良かったのかもしれないが、レギュラーを外され、リーグ戦に出られなくなるのが口惜しくて無理したのが響いているのだらう。かといって決して往時を後悔している訳ではない。何故ならば最大目標である秋のリーグ戦に賭けるうら若き熱き血潮がたぎっていたからだ。従つてスポーツといえはゴルフと巣鴨のスポーツクラブ通いが今の私の健康維持法だ。

先日、恒例の新春OB戦のグラウンドを訪れた。今年は、幸いに好天に恵まれたことであつて、三菱の人工芝のグラウンドに50名近くのOBが集結した(写真)。現役も含めて、半日にわたつて熱戦が展開され、なかなかの盛況だった。これは今年度の幹事団の日頃のコミュニケーションの成果でもあると思つたが、見ていてうれしいのは、幅広い年代にわたる西松会員が参加して、ひとつのボールを追っていることだ。いまだ現役選手として、連日にわたつてボールを蹴っているという昭和41年卒の清水(征)先輩と、40歳以上も年下の、こちらは本物の現役選手が、どちらも必死になつて同じボールを追っている姿を見ると、半世紀近くの歳月の流れを忘れさせてしまうものがある。一方は、あの小平のグラウンドでの日々を昨日のことのように思い続け、一方は、あの小平のグラウンドでの勝利の瞬間に向けて思いをはせる。その双方が、ひとつのボールを奪い合う風景。これが西松会ならではの良さではないかと、あらためて感じるものがあった。

# つながりの力を

この日は、卒業したばかりの若手の西松会員、社会の中核を担つて超多忙の毎日を通す中堅の西松会員、そして60代の西松会員まで、それぞれの世代の多数の参加が得られた。これが西松会の本来のあるべき姿ではないかと思う。毎年、毎年、最上級生としてリーグ戦を戦つた4年生が卒業の日を迎え、それぞれの道へ進むと同時に、新たな西松会員となる。会員数は五百名近くになつている。当然のことながら、会員の年代の幅も、毎年、広がり続ける。世代によって、過ごした時代も環境も異なっているから、その考え方も異なつてくるだろう。しかし、その世代の違いを超えさせるものこそ、スポーツであり、サッカーであり、ひとつのボールの力ではないかと思う。

西松会員同士は、つながっている。途切れることなく、つながり続けている。同期生としてのヨコのつながりはもちろんだが、五百名近くがタテにもつながっている。その、つながりの力を発揮するためにも、西松会の活動への積極的な参画を、この機会に望みたい。特に若い世代の会員のみなさんへ。

会長 土井 徳秋(昭和45年卒)

# 出版へ時間との戦いの日々

一橋を定年退職し、日大に移つて早3年になるうとしていた。今までの30年ほどやってきたことを取りまとめめる仕事をしているのだが時間がかかること甚だしい。とにかくもとも頭の回転が良くないことに加えて、多少自慢できた記憶力がガタ落ちしている。3分前に見た数字がどのページにあつたか思い出せない。同じ論文をダウンロードしたり、同じ本を買つたりは日常的だ。

講義は週1時間、あと多少ゼミがある程度で、自分の時間はたっぷりある。アドミニスレーションに追われた一橋時代に比べて、天国なのだが、能率の低下は深刻。何冊かの本をまとめてそれぞれ英語でも出版するという目標があるのだが、まだ1冊もできていない。英語はヒアリングとしゃべる方はひどいものだけど書く方はちょっと自信があり、また好きなのだが、残念ながら時間が足りない。今書いている本の英訳は人に頼むことになりそ

寺西 重郎(元部長 昭和40年卒)



# 今年もやります！関西西松会

昨年の西松会新聞で報告のとおり、その後も「西松会関西有志懇談会」は皆様のご協力により順調に盛会を続けています。2008年活動状況は概略次の通りです。

- 第5回 日時：4月15日(火) 午後6時より 場所：関西文化サロン梅田(大阪) 出席者：篠宮(27) 神代(29) 佐竹(32) 嶋田(32) 榎山(33) 村林(40) 柴田(46) 松沼(49) 計8名
  - 第6回 日時：10月10日(金) 午後6時より 場所：関西文化サロン梅田(大阪) 出席者：松本(26) 篠宮(27) 神代(29) 中岡(31) 松丸(31) 佐竹(32) 嶋田(32) 中路(32) 村林(40) 天野(44) 柴田(46) 計11名
- 懇談会ではいつものことながら、各自の近況報告、最近の国内・海外サッカー事情、ア式蹴球部現役チームの活動状況等々に就いて情報と意見の交換が活発に行なわれていきます。比較的少人数の集りなので、和気藹々
- アトホームな雰囲気の中で終始しており、楽しい会となっております。
- この会は公式な関西西松会ではありません。あくまでも有志懇談の場であり、卒業年次も案内の都合上等により従来昭和20年代から40年代に集中してきています。しかしどの年代の方でも又遠隔地の方でも、飛び入り大歓迎です。現に過去、平成卒の方、関東・名古屋・山口の方等ご出席を頂いております。
- 尚、本会、次回は2009年4月14日(火) 午後6時より、関西文化サロン(如水会報関西一橋クラブご案内のページに記載あり)にて、と決定済みです。会費7,000円(コピー・資料・飲み放題つき)です。
- 気楽な懇親会ですので初めての方も是非参加頂きます様お願い致します。
- 世話役連絡先：  
TEL・FAX：072(8554) 1590  
メール：ancamake@vanilla.ocn.ne.jp  
佐竹 明和(昭和32年卒)

# 中山学長に 合宿寮で直談判

「十年ひとむかし」といいますが、ここでは半世紀余り昔のことを申し上げようと思います。

私は小学校三年生の冬からサッカーを始めました。今では「スポーツ少年団」で幼年期から始める子供さんも沢山いますが、これは、一九三八年の冬のことです。中学時代は戦中で球技は禁止されていた。戦後、やっと取り組み始めたのですが、用具不足の時代ですからハダシで練習していました。ために再起不能と思われる捻挫をしてしまい、プレイすることは断念しました。

結局、大学に入って(一九五〇年)から本格的な取り組みを再開したのでした。当時は、メンバーも少なく、練習も厳しかったものの中身は極めて家族的な雰囲気がありました。大学四年ではキャプテンを仰せつかりましたが、やったことが二つありました。一つは、国立の中和寮から小平の一橋寮に戻ったこと。これは練習のグラウンドが小平にあったからです。もう一つは、新人(二年生)一九五三年入学(最終的には五人となり、何れも寮生であつたこと)を多く集めたことだからです。一九五三年に有力な先輩たちを送り出したために、極めて苦しい時代でしたが、何とか部員全員の頑張りで関東リーグの二部を維持することが出来ました。

これは今でも同じことだと思えますが、個人としては技術を磨き、能力を伸ばす



ように努力しますし、チームを組めば戦術的な要素が加味され、総合的な力量を発揮する基本が醸成されるものと思えます。

私は卒業を控えた時期に、当時の学長であつた中山伊知郎先生に面会を申し込みました。目的は一橋大学に在学しているスポーツ選手のための「合宿所寮」を建設する希望を申し出たことです。これは未だに実現していませんが、私の想いは、スポーツ選手の明朗性を外に向かつてアピールするような雰囲気が必要と感じていたのでこのように行動に出た訳です。(このことは誰にも話していません。ここではじめて申し上げる次第です)

いくつになつても母校のサッカー部を思うことは誰しも同じだと考えていますが、私もその一員であることを強く認識しています。

神代 祥男(昭和29年卒) 写真

## 喜寿を迎えへの思い

私は平成20年2月喜寿を迎えた。大学卒業後、現場で考えていた喜寿を迎えるという年のことはまったく現実性がなく想像もつかなかつたが、実際に迎えてみると過ぎ去つた過去は将に光陰矢のごとしで早いものである。

振り返ると節目毎の変動は大きかつた。小学校に入学したのは尋常小学校、在学中に国民学校となり、卒業して入学したのは府立八中(現都立小山台高校)である。5年制の中学校であつたが、卒業したのは八新制高校となつていた。大学受験は新制大学である。旧制高等学校もなければ予科も無かつた。小学校に入学し大学卒業までの各節目の変化は大きなものである。

終戦後、学徒動員から引き揚げて中学に戻つたのは2年生の8月である。食糧難がいくらか楽になつてきた頃、サッカー部の練習小屋から使い古したサッカーボールが校庭に出てきて何人かが固まつて蹴るようになっていた。昼休みは校庭全

## よみがえる雨中マラソンの記憶

我々昭和39年卒業組は、1年の時に確か17、18人入部したのであるが、4年間完走者は10人であつた。20年ぐらいい前になるだろうか、まだ働き盛りのメンバーは、外国赴任者あり、関西を始め地方にも散在していた。その中、5、6人の有志が集まり、飲み会を始めたのが発端であつた。そのうちに、キャプテンの池田君の尽力で新年会がスタートし、夏から秋にゴルフ付一部夫人同伴旅行を恒例としてきた。

ゴルフも当初は、池田、石井、大橋、松島、原賀、森岡、永山、石綿であつたろうか。その後、ゴルフ大嫌いの中村を除き、一年下の村林、2年まで一緒だつた加藤や帰国した斉藤も合流し、年2回ぐらゐのゴルフ会が定着してきたのである。

しかし、ゴルフメンバーは5人から6人がやつとで、昔日の知性と頑健を誇つた連中も、癌に蝕まれたり、若い頃の無理の咎が出てきたり、立派な前期高齢者のポンコツ蹴球団に変貌しつつあるのは、時の流れとはいへ受け入れざるを得ない現実なのである。

昨年は、ゴルフ付観光先として、大学2年の時の夏合宿の地、初秋の妙高山麓池ノ平に行つた。

最近の夏合宿は、銚子の先の波崎に行つているようであるが、我々は、1年の時、湯松曾(一昨年訪問)、3年は小平、4年は北軽井沢であつた。湯松曾合宿に当たつては、一部先輩の承諾を得られず、当時の4年生が苦勞したやに伺つている。

この池の平の夏合宿が効を奏したか、秋のリーグ戦では、3部から上がつてきた日本体育大学との入れ替え戦で、4対0で勝ち、見事2部残留をすることができたのも思い出深い出来事であつた。

この池の平に行つたのは、斉藤、加藤に池田、大橋、松島、森岡、石綿が夫婦同伴であつた。大学寮のあつた場所が変わり、近くのイモリ池も立派に整備され遊歩道までできていた。

練習場の学校も特定できず、各自の記憶は曖昧模糊とし、泊まつた部屋、食事の味、風呂の様子、練習場への道も今や判然としない霞の彼方であつた。ただ、野尻湖まで約2時間かけ、合宿打ち上げの雨中マラソンをしたことは共通の認識であつた。47年という時の経過は、前途洋々の青春の輝きは遙か昔の夢のような出来事であつたと実感したのである。

石綿 浩之(昭和39年卒)

## 六十余年前の予科講義のひびき

サッカー部誌の落書帳に加藤春樹(昭和21年卒、故人)の文章が載つているので紹介する。

一月十四日(木)第六時限(注)昭和十八年(一九四三年)のこと  
今、三浦さんが素晴らしい熱意を持つて講義をしている。實際他の若手の先生なぞ問題にならぬ位の迫力である。然るにだ、周囲の生徒の行為を見ると、これには徹底したサボリ振りだ。真面目に聞いている奴などありはしない。中に多少頭を上げて前を見る者がいるが、その目はまるでうつろだ。大方サボルのにも飽きて何か映画の場面でも思い出しているのだろう。他は皆俯いて盛んに小説に首を突っ込んで居る。あつ！ノートを取っている奴が居る、感心だ、と思つたのは誤りで、ノートを写しているのだ。成程、試験も近いからねえ。奥村は感心に今は寝てない。佐藤は「胡椒息子」を読みふけて居る。川端は「さんげ録」、真平は遙か前方で下をむいて居る。胡瓜に耳が生えたような顔だ。とかく申す小生は今まで本を読んで飽きた結果、これを書き始めたのだ。

この間の時間に本科の太刀川さん(注、学生課長)がこの教室を急襲した時の、太刀川さんの憤激、生徒達の狼狽、三浦さんの困惑、さこそと想像される。(拙者はサボつて居た)。實際この状態を見たらこの俺だつて怒鳴りたくなる(早く講義を止めてくれ！とね)

去年の十二月の初めころ中央線の電車の中で太刀川さんと商大生が話しているのを偶然きいていた。色々な言葉の中にとうとうこの話が出て来てしまつた。太刀川さん「予科生には三浦さんの講義はわからんらしい。實際猫に小判だよ」

本科生 「全くですね。私が予科へ行つても予科生の態度には呆れる事が多くありますよ」

▼マキャヴェリの山荘(2002年2月奥村記)  
三浦新七博士が予科の講堂でライオン

の鬣の如き白髪を振りかざして西洋文明史を講義され、我々予科の悪童共も博士の高雅な風格に打たれて珍しく出席率も良く傾聴していたのが六十年前のことであつた。

博士は西洋を理解するには、ギリシヤ・ローマの歴史とキリスト教を知ることが必要であると言説されたが、レネザンス(フランス読み)についてもその二つの要素から詳細に述べられたようだ。

その講義の中でメレジェエコフスキーの小説「神々の復活」の一節を引いてマキャヴェリの生活を語られたことを妙に覚えている。

彼は農地の管理の合間に自分の考えをせっせと書き記した。それが有名な「君主論」に結実した。著述に倦きると家の前の居酒屋に下りてきてワインを傾け村人の話に耳を傾けたと言つた。

イタリヤをバックで旅行した。フィレンツェで午後半日の自由時間があり、聞いてみるとマキャヴェリ山荘はバスで三十分だと言つた。バスは川を渡り南へ「シエナ」への道を辿り、やがて本線から分かれ右に橋を渡り丘を上つてPERCUSSINAに着いた。上品な老夫婦も降りた。彼らと分かれてマキャヴェリ亭の看板を下つたら駐車場で、また街道に上ると西側の間口の大きい茶色の石積みの家に「マキャヴェリの家」との説明版が付いていた。道を向こうに渡ると少し下つてマキャヴェリ亭があつたので、入つてカフェラテを頼む。別れた老夫婦が入つて来た。話してみるとベルギー人で、マキャヴェリを研究したこともあるので、現地を見に来たそうだ。彼らはワインをボトルで買って飲み、一杯僕にも呉れた。これからマキャヴェリのもう一軒の家を歩いて行くと言つた。時間は十分あるが早く帰りたいので断つた。

坂を下つて行くと、櫻や松の林がありドングリや小さい松球が落ちていた。本線との分岐点には「マキャヴェリの家」の案内板に三キロメートルとあつた。バスはすぐ来た。

奥村 一郎(昭和21年卒)

# フランクフルトから「頑張れ！」

2004年度卒OBの甲原と申します。OB・OG、そして現役の皆さんの多くもそうであるかと思いますが、私にとって、現役時代、ア式蹴球部での活動は大学生活の中心でした。

ア式蹴球部で、個性豊かなメンバーと出会い、笑い、ときに衝突しながら、一緒に勝利を目指して日々活動できたことは、私にとって貴重な経験となっています。

私が1年生・2年生のときに、チームは残留・降格を経験し、秋季では悔し涙を流しました。現役最後の3年生のときに、全勝優勝で昇格を果たし、入部して初めてプレーヤー・マネージャー、そして小平まで足を運んでくださったOB・OGの皆さま全員の笑顔で秋季を締めくくれたことに感動したことを、今でも鮮明に覚えています。

私事ですが、昨年サッカー部同期の前田さんと結婚し、前田姓になりました。現在は彼の仕事の都合で、ドイツのフランクフルトで生活しています。

ドイツでも主人は日本人サッカーチームに参加し、毎週末うきうきと練習へ出掛けている。フランクフルトのホームスタジアムにも二人で時々足を運んでブンデスリーガを観戦しており、日本にいたとき以上に(？)サッカーが生活の一部になっています。

現役部員に交じり、歌って踊って応援するのが大好きな主人共々、昨シーズンは小平まで応援に行くことが叶わず、ホームページで試合結果をチェックさせていただけました。惜しくも昇格を逃してしまいましたが、現役プレーヤー・マネージャーの皆さん、昨シーズンの悔しさをバネに、2部昇格に向けて新シーズンを頑張ってください。

ドイツより応援しています。  
甲原 真帆(平成17年度卒)

## 女性会員から

### 相手は代れどいまもマネージャー役

平成18年卒業の大垣真梨子と申します。昨シーズンは小平から足が遠のいてしまいましたが、秋季リーグ中は毎週どきどきしながらホームページをのぞいておりました。スタートダッシュに成功したものの悔しい結果となり、昇格することの難しさを痛感しましたが、ともかくも現役の皆様お疲れ様でした。

私とは申しますと、現在子育て中ということで社会人生活からは退いております。もっぱら子ども中心の毎日ですが、日々成長していく様子を見守れるのはかけがえのない幸福であり、自分も含めた皆がきつことこう可愛がられた時代があったのかと思いをはせると、世界を見る目が少し変わります。マネージャー時代(1年生でした)が、試合中負傷した選手に、慌てたあまりコールドスプレーと間違えてテーピング用の糊スプレーをかけた私が、こどものことに関しては落ち着いて対処できるのも、我ながら不思議なことです。

今もマネージャーの時のように、暑さ寒さの中、砂などの汚れにも構わず、たくましく日常を送る中で、「一生懸命の魂」のそばにいられるという素晴らしい共通項を見出し、つくづく好きだなあと考えています。昨年は、先輩同期とともに結婚が相次いだこともあって、部の仲間と再会できる場に戻りました。すっかり社会人として成長している面が見られる一方で、サッカーの話題で大きい盛り上がる様や、久しぶりに顔を合わせた自然と学生時代のように軽口をたたきあえる間柄であることを確認できると、とても安心できます。

前号の紙面から、先輩方がサッカー部を通じての繋がりをとても大切になさっていることを痛感し、その一員になれたことに感謝します。大切な関係をつないでいきますよう、また、現役を応援するために、今年はずいぶん平に出かけてゆきたいです。  
大垣 真梨子(平成18年卒)

# 1年間、大学サッカーの素晴らしさを体験



交流生として1年間という短い期間で一橋大学に留学してきました。まもなく帰国します。経済学部所属し、日本経済を専門に勉強して、様々なことを学びながら、日本語も上達しました。しかし、なにより、母国のオーストラリアと違う文化を体験し、日本という国をもっと理解できるようになったことが自分にとって、より意義のある経験だったように感じます。

一番勉強になったのは一橋大学ア式蹴球部の部員として学んだことです。オーストラリアの大学はしっかりと部活制度があり、高校卒業後も、本格的にサッカーをしたければ、社会人チームに入るしかありません。一橋大学に来るまで、社会人チームで活躍していました。ここでは、年齢も異なり、様々な生活、目的を持った人が集まり、まとまって練習に取り組むことも難しく、試合でポテンシャルを実現させるにいく状況でした。

一橋大学ア式蹴球部に入学し、週に5回のオーストラリア人から見たら、プロでしか経験できないような激しいメニューに参加し、一生忘れない宝物が出来ました。一橋大学ア式蹴球部にはそれぞれの出身地、学部、性格のプレーヤーが集まっています。その違いを超えるのは同じサッカーが好きであることです。そこで、みんなが一つになり、チームとして同じ目標に向かつて、全力に戦うわけです。この意味で私も1年間、部員として戦って、人生に一番のサッカーを経験できました。

なによりも、オーストラリアの社会人チームの「Team」と一橋大学ア式蹴球部の「Team」の意味には大きな違いがあると感じました。日本に来て、初めて一人暮らしすることになったが、サッカー部が本場に家族のようなものになりました。一週間で、だれよりも会うことも多く、練習後、一緒に食事したり、筋トレしたり、大学生活などについて語り合ったり、お互いサポートし合っています。

最初は知らない人ばかりだったのに、同じ練習を組まされ、一緒に苦しんで、そして楽しんで、成長します。これが、サッカー部の素晴らしさのところだと思います。4年生の先輩にすぐお世話になりました。おかげで、シーズン中、少しずつ進歩してきました。その上、OBさんのおかげでこれほど素晴らしいサッカー部が出来ました。そして、卒業してから、様々な場面で支えてくれていたおかげで、サッカー部がこれからもっと強くなる一方だと確信しています。

もうすぐオーストラリアに帰りますが、去年の自己紹介で、学んだことを地元で活かしたいように書いたと思います。帰ったら、経験したことをいくらかオーストラリアのチームメイトに説明しようと思っています。彼らには理解できないでしょう。そのアメリカと日本の違いについて述べたいと思います。

## 米国から帰国して

西松会の皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。平成9年卒の宇津野でございます。現在伊藤忠商事に勤務しております。海外通信のひとつとして寄稿の機会を頂きましたが、約3年駐在しておりましたアメリカはシカゴより昨年5月に帰国して帰りますので、今回は帰国して改めて感じた

代わりに言葉の通り、この経験を活かして、プレーでサッカー部の実を見せたいと思います。

ロバート・レッドセル(3年)



## 自主運営の中から

### 汲み取るもの

平成2年卒業の諏訪部です。この度、西松会新聞に寄稿するという機会を頂戴しましたゆえ、この場をお借りして、ゼミの恩師である伊丹敬之先生の著書を引きかかせていただきながら、昨今の雑感を記させて頂こうかと思っております。

伊丹先生の著作は数多ありますが、その中でも、珍しく易しい表現で書かれた「よき経営者の姿」という本があります。この本では、よき経営者について、資質、引き際、育成プロセス等、いくつかの切り口で、経営学者の視点から分析されており、「経営とは他人を通してことをなすことである」と定義した上で、よき経営者とは、「人格的魅力とぶれない決断」、「結果への責任感と社会への倫理観」を有する人物である、と記してあります。

識しました。アメリカでは広い一軒家に住み、車で25分程度の通勤でしたが、それが一変、現在は狭小な住宅住まい、1時間強の通勤に苦しみ日々です。

また客先との接待や残業等で平日はほとんど家族、特に子供と過ごす時間がとれず、アメリカに居たころはあんなにパパ子だった長男(アメリカ滞在中に生まれ、アメリカと日本両方の国籍を持っています)との距離が生まれてしまったのが残念でなりません。海外赴任する前は普通

しかしながら、昨今は、こうした「よき経営者」は、会社の経営陣のみならず、チームや課、部という小さな組織においても、残念ながら、それほど多くないのかもしれない。「ぶれない決断」どころか、「結果への責任感」どころか、「如何に自分に責任がないかの論証に全精力をかける」、そういうことを、日常的に目にするのが実情のようです。

一橋大学ア式蹴球部は、小生が現役だった頃も、そして現在も、専任コーチをおかず、学生自ら考え、下級生を束ね、運営していく組織です。サッカーの技量向上という観点においては、それは必ずしもいい面ばかりではないかと思えます。しかし、学生時代から、「人を動かすリーダーシップとはなにか」、「いかにして勝つための組織にしていくなか」といった命題を、必然的に考えなければならぬ環境におかれるということは、何にも代えがたい経験なのだろうと思えます。小生が現役時代、共に小平で汗を流した先輩後輩の方々の中に、すばらしいリーダーが数多くおられるのもその証左かもしれません。

日本経済は、100年に一度といわれる危機的な状況にあります。こうした時代だからこそ、真のリーダーが待望されており、時まさに、学生時代から意識を持って活動してきた西松会の方々が、必要とされるのかもしれない。小生も、伊丹先生の本を座標軸としながら、よきリーダーたる皆様方に負けないよう、日々研鑽に努めてまいりたいと思っております。

諏訪部 伸吾(平成2年卒)

だと思っていた日常生活に、帰国後は疑問を頂くようになってしまいました。ただ、いろいろ問題はありますが、ホワイトカラーの長時間労働や取引先または社内との濃密な関係は、日本の競争力に少なからず貢献していることを考えるのと一概に否定もできず、何とか今はやりのワークライフバランスを実現しようと悪戦苦闘しています。

宇津野 智哉(平成9年卒)

# サッカーと私

私が社長を務める月桂冠の創業は寛永十四年(一六三七年)で、今年で三三二年目になります。創業以来、京都の南、伏見で酒造業を営み、現在では国内トップクラスの清酒メーカーになっています。私は、オーナーである大倉家の十四代目にあたります。

サッカーを始めたのは、小学校の時に少年団に入ったのがきっかけで、いくつかのポジションをやりましたが、高校の途中からゴールキーパーに転向しました。今でこそゴールキーパーは花形ですが、当時は誰もが嫌がるポジションで、要するに、フィールド・プレーヤーで最も役に立たない私がまわされたのです。

大学では体育会に入るつもりは全くなかったのですが、私がゴールキーパーだったことが分かるので、大勢で説得され結局入部させられてしまいました。熱心に勧誘されたのも当然で、当時のサッカー部は私を含めてゴールキーパーが二人しかおらず、どちらかが怪我をすると紅白戦も出来ないような状況だったのです。二人しかいないにも拘らず、下手な私は滅多に試合に出ること

## 拠点を放送から活字に移して

社会人生活のスタートはNHK記者、以来35年。ロッキード裁判、日航機御巣鷹山墜落、リクルート、佐川急便事件、ソウルオリンピック、雲仙普賢岳噴火等々社会部記者として広く取材し、また取材指揮してきた。NHKの「卒業」前には文化事業で藤田嗣治、ダビンチ、ルソー、フェルメール、薬師寺などの貴重な美術品の展覧会を手がけたり、監査部門で内部統制にも係わった。昨年定年退職し関連の出版社で第二のスタートを切り、「出版不況」という荒波に立ち向かっている。

大学時代の一番の思い出は、やはり「関東二部昇格」。リーグ戦では四位ながら入れ替え戦出場決定トナメントで勝ち抜き、入れ替え戦そのものにも勝利！あの日の西が丘の芝生を懐かしがらずにはいられない。今はサッカーをやってはいないが、観戦は大好きだ。創造的で攻撃性溢れるサッカーを見るとワクワクする。他のスポーツも見るが、やはりアドレナリンの出方が違う。

がなく、数少ない出場経験では、国公立戦の決勝戦で学芸大を破って優勝したことや、関西遠征で同志社に勝った時のことなどが思い出に残っています。

大学卒業後は、プレーすることは滅多になくなりりましたが、観戦の機会は増え、現在、地元京都サンガFCの後援会副会長を務めています。後援会の仕事を通じ選手やスタッフと触れ合う機会も多く、朴智星選手(現マンU)とツーショットで撮った写真は今でも家宝として大切に残っています。また、ゴールキーパーコーチだった元日本代表の松永成立さん(現横浜・Fマリノス・コーチ)とは、ゴールキーパー仲間としてよく飲みに行っていました。京都サンガFCはこの十年間に三回降格し三回昇格するという、応援する方としては気の休まることのないチームですが、今後も温かく見守りたいと思っています。

京都に住んでいるため、学生の応援やOBの会合にはなかなか参加できませんが、現役のより一層の健闘と西松会の発展を祈念しています。

大倉 治彦(昭和56年卒)



## ところで日本では今、新しい本(雑誌除く)が毎日何と！二百点以上出版されている。当然話題を集める本ばかりではない。一方書店の世界を見ると、都会で大型店が華やかに開業する反面、地方では街中から相次いで本屋さんが姿を消している。流通構造や業界慣行の問題の他、インターネットの急激な進展に立ち遅れているような所もある。しかし、出版社・編集者は少しでも良い本を出したいと悪戦苦闘している。活字離れが言われる若者たちに、どう、本に向き合ってもらえるのか。本を買って求めて家路を辿るとき、手に本の重みを感じる何とも言えない幸せ。そんな幸せを大事にしたい。

私の拠点は放送から活字の世界へ変わったが、豊かな人間の文化を大事にし、創造し、継承してゆく。こんな時代だからこそ、きつと必要な、そんな流れのささやかな力になりたいと最近思っている。

緒方 徹(昭和49年卒)

# サッカーに入れ込んだ台湾勤務

ずいぶん昔の話となりますが、私が、台湾に赴任したのは1998年、日本が初めてワールドカップフランス大会に出場した年でした。台湾ではサッカーの人気は低く、サッカー人口は極小、結果国内リーグも代表チームもパツパツない状況であり、現在でもそれは続いており、台湾でのサッカー人気は低い原因を挙げると、設備の不足によるスポーツ人口の裾野の狭さや他の人気スポーツの存在が挙げられます。

台湾は、都市部での人口の集中度が高く、その結果、人口に対する公園・広場等の子供が外遊びをする設備が決定的に少なく、遊びでスポーツをする場所が(一部競技を除き)ほとんどない状況です。各学校には、立派な校庭・体育館等の設備はあるものの、マンモス校のため一人あたりのグラウンド・体育館の面積は限られてしまい、多くの人がスポーツを楽しむ環境には程遠いのが現状です。

また、グラウンドに限って言えば、学校の校庭には芝生の敷設が義務付けられており、1年のうち一定期間をその養生に充てるため、その間使用することができません。このことが、一人あたりのグラウンドの使用時間を制限し、台湾の子供たちからスポーツを楽しむ時間を制限することにもなっています。この結果、台湾の人たちは幼少期よりスポーツを楽しむ機会が(日本と比べて)少なく、大人になってもスポーツを楽しむ人たちが多くない状況を生んでいると思われまます。

台湾の最も人気のあるスポーツはバスケットボールです。街中にはバスケットコートがところどころに敷設され、時間を問わず男の子たちがバスケット遊びに興じていました。トッパリーグ(一部プロ化されている)の試合は、地上波のテレビ放映があり人気番組となっており、トップの選手はフィリピン・中国大陸のプロチームで活躍したり、国会議員になったり等、国民の注目を集めていました。

もう一つの人気スポーツ、野球についてはプロ野球の団体が2つあり、約100のプロ球団が現在でも活動を続けています。

人気スポーツに押される形で、台湾のサッカーは競

技人口も少なく、国内リーグのメディアへの露出はゼロ。今も変わっていません。私も台湾に赴任したころには、サッカーやたくもどこに行けばサッカーができるのか全く見当もつかない状況でありました。

赴任後の数ヶ月、週末ゴルフで気を紛らわせ、物足りなさを感じていたところに、私は幸運にも台北市の日本人小学校のサッカーチームを指導する機会を得ました。

学校の課外活動として、毎週一回休日の午後小学校のサッカーチームの練習会が行われており、1年生から6年生までの約50人の選手たちが、ボールを蹴りに集まってきました。

日本での少年サッカーチームの指導経験が買われて活動中のサッカーチームの指導者に抜擢されたのですが、久しぶりにサッカーに関わる喜びが『サッカー不毛の地、台湾にいてもサッカーが上手くなれる』という妙な信念のもとに、ずいぶん入れ込んで指導を引き受けたのを覚えています。

毎週2時間ほどの練習時間の中で、参加するメンバー全員にサッカーを楽しむ場を提供しており、その点は非常に評価の高い活動ではありましたが、このチームの最大の制約は、大会・試合数が少ないことでした。このチームは台湾のサッカー協会に加盟をしておらず、参加する大会がありません。練習試合も年に一、二度を数えるくらいです。

ただ、このチームは駐在員の子弟が多いため、春と秋に多くの入退団者が出るので、退団する選手たちが口々に『サッカーが大好きで、ここを離れてもサッカーをする』と言ってくれたことが、私にとつての救いとなっておりまます。

指導をするということと自分でプレーをすることはまったく違います。サッカーがしたいと思いつながら数年が経過した2000年の秋、インターネットの掲示板に東南・東アジア地区の日本人駐在員のサッカー大会の参加チームの募集記事を私は見つけました。その記事によるとバンコク・シンガポール・ソウルなど主だった都市には必ずチームがあり、例年参加しているようでした。多くの駐在員を集める国で参加をしていないのは台湾だけと知ったとき、『台湾にい

るので・・・できない、なんてことはない』という妙な考えが再び頭をもたげ、私は、その掲示板の書き込みの下に、台湾サッカーチームの参加者募集の書き込みを入れてしまったのでした。

次の週末、少年サッカーチームの練習の後に、コーチ陣や父兄に台湾サッカーチームの創設と日本人駐在員大会の参加を相談し、『どりあえずやってみる』という同意を受けて、活動が動き始めまます。ネット・口コミで参加を募ったところ、中学生を含め30人を超える希望者が集まり、チームが発足しました。

当時は、どこに練習場があり、どのようにすれば借りられるのかわからず、定期的な練習・試合も組まれません。その中で記念すべき第一回目の対外試合は、台北市郊外でサッカーをしていたタイ人との試合でした。スパイクもはいていないユニホームもばらばらなタイ人のチームにピスを揃えて対抗した日本人チームは惨敗を喫します。

その後も順調に活動範囲を広げ02年には、台北市の社会人リーグに加盟することとなりました。当時の台北市の社会人リーグは、台湾人のチーム、欧米系駐在員のチーム、ナイジェリア人のチーム等が参加しており、一種国際大会の感を呈しておりました。会場は、小中学校の校庭や河川敷の公園等、特に河川敷の公園では水道さえなく、炎天下のグラウンドで、ペットボトルの水だけを頼りに試合をし、汚れた体でタクシーに乗り、家に帰るようなことまありまました。

そのように充実した週末を過ごせるようになったころ、私は帰国の命を受け、日本の気象・快適な生活に戻りますが、台湾のチームはますますの発展を続け、今もさらに活発な活動を続けています。現在では、整備された河川敷のグラウンドで毎週必ず練習を行い、在台的外国人リーグに所属して定期的に真剣勝負を行っているとのことでした。

私も年に一回、OBチームの一員として台湾にサッカーをしに渡りますが、西松会の皆様も台湾に赴任の際には、スパイクをお忘れにならぬようご注意ください上げまます。

(台湾チームのホームページ: <http://jtc Taipei.web.fc2.com/>)

寺田 広志(昭和62年卒、キリンビール勤務)

# 子供達から教えられる コーチ役の日々

3年前から、長男(現在、小3)が近所の子供達と遊び感覚で入ったサッカーチームのコーチをしています。このチームの前身は、東京都狛江市教育委員会体育課が運営主体の活動は終了してしまつたのです。子供達の保護者から存続を望む声が出され、コーチ役を引き受けていたお父さんたちがボランティアをかっててクラブを引き継ぎ、02年より自主運営することとなりました。

クラブチーム等全国大会出場を目指して本格的にプレーするのはなく、とにかく、皆で楽しくボールを蹴りたい、触りたいという子供達が参加しているのがこのチームの特徴です。他のサッカーチームに加入している子でも、自由に参加できるシステムを採っています。他チームでは既にバスサッカーが主体で、練習もパス練習が多くなる中、当チームでは沢山ボールに触られる、色々な技を教えてくれる、多くの大人が色々アドバイスをくれる、ということまで噂が広がり、現在は加入者が1学年30名強に増えて、コーチ陣にとってはそれはもう大変な状況となっています。

コーチをしていると、当然のことながら子供達から教えてもらうことは多く、一緒に成長している感覚です。とりわけ、子供はサッカーのイメージがまだできないので、大人と話す以上に論理的に、正確に、言葉を尽くして説明をしなければいけないとか、自分で考えさせるために、いかにヒントを与えながらきつかけを作つてあげるだとか、高度なコミュニケーション術を私も学んでいるところまます。

サッカーに巡り合ったお陰で、現在でも充実した時間を過ごすことができます。

向畑 哲也(平成6年卒、伊藤忠商事食品流通戦略室勤務)

幅広く会員から原稿が寄せられました。私たちの共通の記憶といえば泥んこのグラウンドくらいですが、読んでみると半世紀近く前のあの瞬間が蘇って、思わず「そうそう」とうなずく自分の姿がありました。遠くても深い記憶をもとに結ばれた西松会の活動をどう展開してゆくの、歴史が長くなるほど難しくなる課題ですが、代表幹事から色々な取り組みが紹介されています。なかでも総会の場での講演企画はいまから楽しみです。

神代先輩が合宿寮をめぐる話を披露されています。西松会100周年もそれほど先のことではありません。危険ならぬ「100年に一度のチャンス」かも

れません。合宿所のほかにも、小平の芝生化、ほつておけば散逸しかねない会員手持ちの資料を集めて保存する西松会アーカイブスの創設。実現はともかく夢は語りたいと思いました。

(昭和41年卒、相良 保彦)

## 編集後記